和解の福音に奉仕する

コリントの信徒への手紙　二　五章一六節―二一節

二〇一〇年三月十四日礼拝説教　秋吉隆雄　牧師

人は誰でも救いを求めています。それは、人間が生きていく上では、必ず苦しみ、悲しみ、痛みなど様々な問題があるからです。これらから解放され救われたい、誰もがそのような救いを求めています。聖書は、もちろん人間に対しその救いはある、そして、その救いはこうだと告げています。聖書が告げている救いとはどのようなものであるのか。そのことをお話しする前に、まず確認しておきたいことは、「全き救い、絵に描いたような救いはない」ということです。すべてが楽しく、うれしく、痛みなく、何の問題もない救いはない。人間は体を持ち、時間の中を他人と共に生きていますから、必ず問題が生じる。ですから「全き救い」はない。このことを認識した中で、聖書が告げる救いとはどのようなものであるのか。わたしは、聖書では四つの言葉で表現されていると思っています。一つは「罪の贖い」です。二つ目は「罪の赦し」です。三つ目は「義とされる」です。四つ目は「和解」であります。この四つの言葉で救いが表現されていると思っています。

まず「罪の贖い」でありますが、これは旧約聖書の信仰の伝統を色濃く受け継いでいます。旧約聖書の民は、義なる、そして聖なる神様を信じました。その神様を信じた時に、自分の中にある罪、暗い影を見せられました。この「罪」「影」を取り除きたい、

そして義なる聖なる神様と共にありたいと願いました。そこで、この「罪」「影」を取り除くために、羊や牛や鳥などの血を捧げました。血は命であります。その命を捧げて罪を取り除いていただこうとしました。これを「罪の贖い」と言いました。動物の血を代償にして神に罪を贖っていただくことです。罪の代償として捧げられる動物は、膨大なものでした。エルサレム神殿には、捧げられた動物の血が流れる溝があったそうです。血は空気に触れると固まりますが、固まらずに流れるほどの血を捧げたのです。これは、旧約聖書の民が、自分の罪がいかに重いものであるかを知っていたということです。エルサレム神殿は血の匂いがぷんぷんしていたと思われます。日本の神社仏閣は清楚で空気が澄んでいますけれども、聖書の民の神殿は血の匂いでむせかえっていたと思われます。動物の血で罪を贖う。そして、神と共にあろうとした。これが第一の「罪の贖い」の救いであります。

第二は「罪の赦し」であります。「罪の赦し」は「罪の贖い」と同じ信仰です。罪を赦していただいて初めて神と共にあり得る。ここで「罪」とは何かという問題が大切になります。聖書が言う「罪」とは、もちろん社会的な犯罪ではありません。「罪」は神不在、そして隣人不在です。神がおられない。ここではすべてが虚無です。そして隣人の不在、それは愛を失っています。「虚無」と「愛の喪失」を「罪」と言います。ですから「罪」は人間の生の根底を無意味さへと追いやる力です。この「罪」が赦されるとは、神を知ること、そして隣人を見出すことです。自分の命は神にあ

る、そして愛する隣人がいる、これを「罪の赦し」と言います。

三つ目は「義とされる」ということです。日本基督教団の信仰告白の核心は、「ただキリストを信ずる信仰により、我らの罪を赦して義としたまふ」です。「義としたまふ」の「義」は、ギリシア語でディカイオスネーと言います。これは裁判用語で無罪放免という意味です。裁判において「あなたには罪がありません。無罪放免です」と宣告される。これを「義」というのです。イエス・キリストは、目を天に上げようともせずに胸を打ちながら「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と祈った徴税人が、神に「義」とされたとたとえておられます。神に「義とされる」、神に罪なしと宣告される。これが三つ目の救いです。

四つ目は「和解」です。「和解」はAとBが仲直りをして結び合うことです。これはもちろん神と人とが結び合うことです。神と結び合うためには「罪」が贖われ、「罪」が赦され、神に「義」とされていなければなりません。聖書の告げる救いは、「罪の贖い」「罪の赦し」「義とされる」「和解」の四つの言葉で表現されています。その根本は、「罪なき者とされて、神と共にあること」すなわち「インマヌエル」です。これが聖書における救いです。

モーセが出エジプトの使命を告げられた時に、神様はモーセに対して「わたしは必ずあなたと共にいる」という言葉を繰り返し語っています。四十年間、荒野を恐怖におびえ、民衆を率いて旅をしたモーセほど苦しんだ人はいないでしょう。苦しみがないことが救いではない。神が共におられる。このことがモーセの救い、

支えであったのです。また、預言者エレミヤが預言者に立てられた時に、神様は、「わたしはあなたと共にいて必ず救い出す」と語っておられます。エレミヤは、預言者としての苦しみの中で自分の生を呪って、「なぜ、わたしは生まれてきたのか」と嘆いています。嘆きのないことが救いではない。そうではなくて、神が共におられることがエレミヤの救いだったのです。

新約聖書において、マタイによる福音書の最初、イエス・キリストがお生まれになった時に、天使がヨセフに対して『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は、『神は我々と共におられる』という意味である」と告げています。イエス・キリストのご降誕、これは即「神が共にいる」「インマヌエル」であると告げています。そしてマタイによる福音書の最後、十字架の死から復活し、天に帰られるイエス・キリストが「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と宣言しておられます。「インマヌエル」、神が共にいてくださる。この事実こそが聖書の語る救いです。そして、この救いの究極は、イエス・キリストの十字架であります。イエス・キリストは十字架に架けられ、肉を裂かれ、血を流されました。旧約聖書時代は、羊や牛や鳥の血を捧げて贖いの式をしていました。新約聖書においては、神の子イエス・キリストはご自身の体を十字架に捧げて人間の罪を贖ってくださいました。すなわち、「罪の赦し」という出来事を実現・成就してくださったのです。そして、それは別の言葉で言うならば、「神に義とされた」ということです。

「罪の赦し」、無罪放免は罪がなくなってしまったということではありません。そうではなくて、人間は死ぬまで罪にまみれています。けれども、イエス・キリストの十字架によって、罪ありながらも「罪なし」と神様は認めてくださった。ですから、今や人間と神は和解して神と結び合っているのです。

宗教を英語では「レリジョン」と言いますが、元のラテン語は「レリギオ」と言います。この「レリギオ」は「結ぶ」という意味です。神と人とが結び合う、これが聖書の告げる「救い」、宗教が持つ本来の意味です。

教会は、イエス・キリストの十字架の出来事を「福音」と言って宣教してきました。「神はわれわれと共におられる。だから大丈夫です。安心して生きましょう」と告げてきました。ここで大切なことは、わたしだけが罪贖われ、罪赦され、義とされ、和解に与っているのではないということです。わたしの隣人も、また目に見えない遠い所にいる人も、同じインマヌエルの福音に与っているということです。キリストを信じている人はもちろんでありますが、信じていない人、またイエス・キリストを知らない人も、神はイエス・キリストの十字架において、生を是認してくださっている。だから、隣人と共に生きようとするのです。わたしたちは、神にあって命が保証されています。その保証の元で隣人を見出し、一緒に生きましょう。これが伝道ということです。信じたわたしだけが神と和解し、信じていない人は和解に与っていないと思い上がると、必ず争いが起こります。「わたしは正しい。あな

たは間違っている」と、人を見下すようになります。イエス・キリストの十字架の福音は、わたしとあなたが同じところに立って生を互いに認め合う。そういう開かれた福音なのです。

さて、今日は礼拝後に教会総会をいたします。次年度の計画総会でありますが、次年度の主題聖句に選んだ御言葉は、教会の暦で今日の礼拝で読むように定められた御言葉と重なりました。コリントの信徒への手紙二　五章一六節から二一節までをご覧いただきたいと思います。「それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。」

この手紙は、パウロが問題の多いコリント教会に宛てて書いた

手紙です。ここにはパウロの福音理解の核心が語られています。まずパウロは、「今後だれをも肉に従って知ろうとはしません」と言っています。「肉に従って知る」、これは人を外見的に見るということでしょう。たとえば、親が、家柄がどうであるか、学歴は、経済力はどうであるか、外側から見て判断する。それが「肉に従う」ということでありましょう。そういう認識はしないとパウロは言っています。これはコリント教会に対する批判の言葉です。そしてイエス・キリストを知る場合も、同じように肉に従って見ないと言っています。この手紙は紀元五五年頃書かれています。イエス・キリストが十字架で殺されてから二五年ぐらい過ぎています。肉のイエス・キリストを知ることは、もはやできません。パウロはこの言葉で、イエス・キリストを「霊的に、信仰的に見る」と語っています。前の一五節で、パウロはこう言っています。「その一人の方はすべての人のために十字架で死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。」死んで復活されたイエス・キリストのために生きる。これが肉に従って知ることとは違う、霊的、信仰的にイエス・キリストを知るということです。肉ではなく、霊においてイエス・キリストを知り、信じる。その者は、はっきりとイエス・キリストと結び合わされていると言っています。

このように、信仰においてイエス・キリストと結び合っている者は、新しく創造された者である。古いものは過ぎ去り、新しい

ものが生じた。イエス・キリストを信じる者は新しい存在とされ、古い罪に死んで、神にある命を生きる者とされたという意味です。アメリカの神学者パウル・ティリッヒの言う「ニュービーイング、新しい存在」です。「生まれ変わった」というのです。この新しい存在は、神から出たことである。自分自身がいくら努力しても、新しく生まれ変わることはできません。神の力において初めて可能なのです。神は、イエス・キリストの十字架を通して、わたしたち人間を神と和解させてくださった。

人間は死ぬまで罪の縄目から解放されることはないけれども、罪なしと認め、義を宣告する。それをパウロは、「人々の罪の責任を問うことなく、神ご自身とわたしたちを和解させ、結び合わせてくださって、インマヌエルの福音をお示しくださったのです。先ほど申しました四番目の「救い」の内実を、パウロは「キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい」、神と結び合いなさいと語っています。

そして最後の二一節でも、「罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです」と言っています。イエス・キリストは罪のない方でした。しかし、神は人間の罪を贖い、赦すために、あえてイエス・キリストを罪ある者として十字架で裁かれました。そのイエス・キリストの十字架によって、わたしたちは神の「義」を得て、神様から「お前、よろしい。無罪放免」

と言っていただいた。先ほど申しました三番目の「義とされる」、この救いをパウロは書いています。

「和解」も「義」も「罪の赦し」も「罪の贖い」も同じ意味です。これらの言葉において、「今、あなたは神と共にある。インマヌエルの救いが保証されている」と語っています。わたしはこの福音を「生の絶対的是認」と表現しています。自分が自分を受け入れることができずに苦しむ。また人が自分のことを否定する。しかしながら、神はイエス・キリストの十字架において絶対的にわたしのことを「良し」と是認してくださっている。これを信じる。これが福音なのです。わたしたちはこの福音に立つのです。わたしの生が、自分や人や社会に云々される必要はない。神が絶対的に保証してくださっているという事実を受け止めるということです。これ以上の安心はないわけで、この安心によってわたしたちは前に向かって、どんなに苦しくとも希望に向かって立たされていきます。わたしはこの信仰に懸けて今まで歩んできました。

パウロはさらに論を進めていきます。それは和解の福音をいただいた者として、和解のために奉仕する任務がわたしたちに与えられていると言うのです。「和解のために奉仕する任務」、それを「和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです」と言っています。そしてパウロ自身は、「神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています」と言っています。和解の福音にひたすら奉仕する務めに励んでいると自分のことを語っているわけで、パウロの回心後の生活は、

まさにこのことのために文字通り命を捧げて生き抜いたのです。

今日の礼拝の後、教会総会をいたします。次年度の年間主題を、「キリストによる神との和解に与り、その和解に奉仕する」にしたいと思っています。今日の御言葉の五章一八節後半、「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました」から導かれた主題です。この聖句を次年度の教会の目標にしていきたいと思います。

パウロの時代は一世紀の半ばごろです。和解の福音が人々を喜びの中で立ち上がらせることができました。わたしたちの二十一世紀の初め、この時代もまた、パウロの言葉が、福音としてわたしたちを生かしていきます。わたしたちは、空しく生まれて空しく死に渡されていくような、無意味な、虚無的な生を生きているのではありません。そうではなくて、神にあって是認され、罪なしとされて神と共に生きる。そのような確かな生が約束されていることを信じて生きる、というのがわたしたちの教会の信仰です。このことを受け止める時に、本当に自分を大事にしよう。そして隣人も大事にしていこう。そういうことが示されていきます。その時に互いに和解し合って生きる。神の義、キリストの十字架の赦しを受けて、神様と一緒に生きられる。そういう道が開かれてきます。今日の時代は、まさに共に生きることを失って、「わたしが」「俺が」と傍若無人に振舞い、そこに本当に悲しい出来事が続いて起こってきているように思われてなりません。これは個々人

の問題だけではなくて、集団においても、また国家と国家の間においても起こっています。大きな悲劇が累々と広がっています。その中にあって、わたしたちはキリストによって与えられた和解の福音を信じて、これを生きるのです。このことを教会の方針・目的にしていきたいとわたしは願っています。

先週の水曜日、港南台家庭集会がありました。そこで読んだイエス・キリストの祈りの言葉が心に残ります。イエス・キリストは、最後の晩餐の後、長いお別れの説教を弟子たちにされました。その後、祈っておられます。「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください」と祈っておられます。神様とイエス・キリストと人々、この三つが愛において一つになる。和解し、共にあることをイエス・キリストは祈っておられます。まさに「和解の福音を生きよ」と祈っておられます。

次年度、二〇一〇年度、心を新たにしてわたしたちはイエス・キリストとどう関わって、どう結びついていくのか。この信仰を問いながら、ご一緒に歩んでいきたいと思います。イエス・キリストの十字架は、わたしたちが神にあって生きられる確かな保証なのです。この十字架の上に固く立って、和解の福音を証しする群れとしてこの時代に生きていきたい。そのように御言葉から示されます。お祈りを捧げます。

神様、聖書の御言葉本当にうれしく思います。神様がよくご承知のように、わたしたちは本当に罪深い者でありますけれども、

そのようなわたしたちを憐れんで、独り子イエス・キリストの十字架によって罪贖われ、罪赦され、神に義とされ、和解の福音に与っている事実を示されます。パウロはそのことを力強く証言し、「生きよ」とわたしたちを励ましています。この福音に立って歩み続けることができますように、わたしたちはあなたが与えてくださった和解の福音を人々の間で奉仕する務めを授けられています。教会が、この困難な時代にその務めを十分に果たすことができますように、知恵と勇気とをお与えくださいますように、お願いいたします。人間の罪が織りなす様々な悲劇がありますけれども、その悲劇を超え、神様はイエス・キリストによって「良し」としてわたしたちを祝福してくださっています。あなたの祝福に心を寄せながら歩み続けることができますように顧みてください。わたしたちの教会の上に祝福が与えられますように、互いに受け入れあって喜びながら生きることができますように祝福してください。群れの中で様々な重荷や悲しみ、痛み、苦しみを負っておられる兄弟姉妹たちの上に、特別な顧みを与えてくださいますように、あなたに望みをおいて生きることができるように支えてくださいますよう祈ります。神様、わたしたちの愛するこの日本の国の上に、また世界の上に、あなたの愛と正義と公平をお示しくださいますように祈ります。自分の力で立とうとする時には、必ず足元から崩れていきます。しかし、あなたを信じて一緒に生きようとする時に、素晴らしい喜びが広がっていきます。その喜びを分かち合う世界をわたしたちにお与えください。そのことのた

めに小さな働きを果たすことができますように力づけてください。
心からなるお祈りをキリストの御名によって御前にお捧げ申し上げます。アーメン

引用文献

聖書　新共同訳、日本聖書協会、一九八七年九月

讃美歌２１、日本基督教団出版局、一九九七年四月